

特集：魔法の習慣11

第4章

いつも風呂敷の心で

——ふろしき王子 横山 功さん



西門 克郎

東京都中小企業診断士協会三多摩支部

テレビ、新聞、インターネット等、各メディアで「ふろしき王子」として紹介され、風呂敷のさまざまな使い方を伝える横山功さん。その活動は風呂敷の枠を超え、エコロジー、和文化、防災、子育てなどさまざまなテーマのワークショップを全国で開催している。

ふろしき王子に魔法の習慣を聞くため、東京都府中市の表通りから少し横道に入ったカフェで待っていると、彼は風呂敷包みを背負い軽快な足取りでやってきた。

1. 風呂敷は即興創作料理

風呂敷の魅力を横山さんに聞くと「変幻自在で、何度でもやり直しがきくところ」。



ふろしき王子の横山功さん

風呂敷そのものの企画・販売、関連する本の執筆や講演活動、テレビ出演などその活動は多岐にわたる。

しかし、風呂敷が横山さんのすべてではない。あるときは商店街のシャッターに絵を描き、また、あるときは似顔絵教室や忍者教室で先生を務め、環境関連の会社のお手伝いをすることもある。自宅の庭では麦や稲などさまざまな植物を育て、生き物たちとともに暮らす横山さんについては、その仕事も生き方も、一言で語るのは難しい。

横山さんの風呂敷はカバン替わり。そのほか、ポシェット、リュックサック、マスクと、何でも風呂敷で作ってしまう。結び方、包み方の種類がどれくらいあるのかを聞くと、「風呂敷は即興創作料理」と言う。包むものによって自在に形を変え、元に戻すことも簡単にできるのだ。また、必要であれば、風呂敷に紐を組み合わせることで可能である。

横山さんの風呂敷教室では、包み方を最初に教えない。まずは、参加者に自分で考え、包んでもらう。種々自分流に考え、アレンジするのが風呂敷の楽しいところ。すぐもとに戻せるのだから、まずはやってみる。

普段から風呂敷を工夫して使っていれば、災害時も手足のように風呂敷を使い、避難袋、マスク、三角巾を作ることができる。

「私は、風呂敷そのものが好きなわけではありません。大事なものは、身の回りにあるものを使って解決することです」



インタビューに答えながら風呂敷で作ってくれたポシェット

2. 風呂敷との出会い

横山さんは東京下町の生まれで、実家は100年続く道具屋。小さい頃は生き物が大好きな少年だった。しかし、図鑑の生き物は下町にはほとんどいない。だから、横山少年はそれらを絵に描き写した。そしていつしか、そういった生き物たちが生息する自然環境にも興味を持つようになった。

学業は、中学・高校の6年間常にトップクラスだったが、そのまま一般の大学には進まず、美術大学へ突然の進路変更。専門の予備校に通い、入学を果たした。

横山さんと風呂敷との出会いのきっかけは大学3年生の春休み。部屋の掃除をしていたとき、押し入れを開けると、買い物袋や空き箱が山ほどたまっていた。「捨てるのがもったいない」が口癖の祖母の影響だった。

「1つの部屋でこれだけあるのなら、日本全国の家庭にはどれくらいあるのだろう」

デザインを勉強していた横山さんは、それらを捨てずに済む方法がないか考えた。

「そうだ。布ならゴミにならない」と、ミンでカバンを作ってみた。だが、使わなくなったカバンは押し入れの肥やしとなりカビが生える。「もっと良い方法はないか」と解決法に悩んでいたとき、ゲスト講師として大学に来たマーケティング・コンサルタントの谷口正和さんが「風呂敷は便利」と語るのを聞いた。

「これだ。風呂敷を使えばゴミを減らすことができる」

さっそく、風呂敷の有効性を確かめるため、横山さんは青春18切符を買い、風呂敷に荷物を入れて旅に出た。それまで何度か青春18切符の旅をしたが、一番楽な旅になった。

重い荷物を風呂敷でさまざまに試して包み、その都度使いやすい形に変えた。風呂敷を背負うと圧力が1ヵ所に集中せず広範囲に分散するため、リンパマッサージのような心地よい刺激となる。また、その適度な圧力は、体の隅々に目立たない筋肉をつけた。

「こんなに便利で楽しいものはない」

何かを我慢することなくエコが実現できる風呂敷の発見。ここから横山さんの風呂敷ライフが始まった。

3. ふろしき王子の誕生

風呂敷に目覚めた学生時代。大学を卒業する頃には、横山さんはバリバリのエコロジストになっていた。就職活動では、自然に優しいとはいえない大量生産品を作る企業に入る気にはなれなかった。

その頃、街を歩いている時に自然食品店のホームページ担当の募集を偶然見つけ、仕事を得ることができた。それと並行して、学生時代に習った姓名判断、実家の道具屋の手伝い、風呂敷教室、似顔絵教室などさまざまな仕事をするようになった。

ふろしき王子の誕生は、奥様と出会った少し後のことになる。2人は小田原のみかん狩りで巡りあった。1年後、伊豆長岡にある知り合いの温泉旅館へ2人で立ち寄った際、そこでカフェをやらないかと声をかけられる。

夫妻は、東京から移住してカフェを始めたが、温泉旅館内での営業のため、土日は客が来るものの、平日には閑古鳥が鳴いた。ちょうどその頃、高校野球でブームになっていたハンカチ王子にちなみ、旅館の大女将がふろしき王子と命名してくれた。

なかなか慣れない生活の中、天然酵母のパ

ンづくりや餅つきはうまくなったが、そのうち、地元が恋しくなり、結局4ヵ月で東京に戻ることになった。

4. ギリギリの生活の中に魔法の習慣

東京では、風呂敷の教室と販売、絵描きを中心にさまざまな仕事をしたが、生活は相変わらずギリギリ。すべての銀行口座の残高の合計が1,000円を切るようなことが日常茶飯事の生活が15年続いた。

そのような極限の状況をどうして乗り越えることができたのかを横山さんに聞くと、「大丈夫だと常に信じていました」と言う。そのための秘訣を尋ねると、「もう1人の自分に『これは本当に問題か?』と常に問いかけることです」という答えが返ってきた。

これが横山さんの魔法の習慣。そうすれば必要以上に不安にはならない。問題ではないことを問題として、余計なことをすることこそが問題なのだ。

学生時代、中間テストや期末テストの前夜、勉強の途中で寝てしまった横山さん。試験当日になって当人は大慌てしたが、彼の母は「試験くらい大丈夫」と問題にしない。そのような小さなことにはこだわらない江戸っ子気質の生活環境で横山さんは育った。

横山さんの魔法の習慣は、風呂敷にもどこか通じる。風呂敷をカバンに入れておけば、日常生活でも非常時でも、臨機応変に取り出して同じように使える。準備も取り越し苦労も不要。必要になれば、中身に合わせてその場で包めばよい。そして使い終わればもとに戻して洗濯するだけ。前にも後にも引きずらない風呂敷の使い勝手は、宵越しの銭は持たない江戸っ子そのものだ。

5. 思いを伝える魔法の習慣

「やるべきことを緻密にやること」

これも横山さんの魔法の習慣。身の回りの小さなことを1つひとつ丁寧に行うから、横山

さんへの仕事の依頼は途切れることがない。

横山さんは見えないところも掃除する。

「散らかっていても掃除をすれば空気が変わる」

雑巾がけも同じ。1回拭くのと2回拭くのとでは、掃除の後の世界が違う。その理由は、掃除をしたことがどこかで相手に伝わるから。ちゃんと行動したことが次につながる。横山さんの言葉を借りると、「行動したときの思いは、モノを介して相手に伝わる。そして思いは時を越えて人に伝わる」。

東京・三ノ輪の商店街。全国の多くの商店街と同様、元気であふれていた昔の面影はない。横山さんはそこで、シャッターに絵を描く。その絵を見た近隣の店主が横山さんに「うちの店のシャッターにも絵を描いてほしい」と頼んでくる。ときには、徹夜でシャッターの前に立ち、自分の思いを絵にする。そこには、住んできた人々の歴史が刻まれていると感じるからだ。

古いシャッターはまるで生き物。自分の思いはペンキを介して伝わっていく。緻密に丁寧に何度も何度もペンキを塗り重ねると、それが味になる。そこに住む人たちが飽きないシャッターに生まれ変わらせることが大事だと思う。

決してインパクトを狙うわけではなく、その町、その通り、そこに住む人々を感じ、汲み取った思いを緻密に丁寧にシャッターに描く。本人は意図していないが、その真剣な情熱は絵を通じて商店街を元気づけている。



横山さんが描いたシャッターの絵

6. 風呂敷の心

ゴミを減らそうと使い始めた風呂敷だが、本当に大切なのは風呂敷の心。「中身に器を合わせる、それが風呂敷」と横山さんは言う。さらに「人とルールの関係も同じです。ルールに人が合わせるのではなく、人にルールを合わせる」と熱く語る。

風呂敷はすぐにもとに戻してやり直しがきく。だからこそ試してみようという気持ちになる。

「できることをできる範囲でやってみる」

現在はそのような心境である。20歳代の頃はバリバリのエコロジストであった横山さんも肩の力が抜け、かつての面影はない。

風呂敷の心は、自然や生き物との接し方にも通じる。風呂敷のようにすぐにもとに戻せることが自然においても重要。家や衣服、食器など、身近な生活を支える材料は、自然由来のものがいい。人工物と違って、自然由来の素材には適度な隙間があり、横山さん曰く「愛は表面積に比例する」。つまり、隙間により表面積が広い天然素材は、人や生き物には心地良い。

たとえば、その隙間が人や生き物の隠れ家になる。適度な隙間のある繊維は空気を通し、ときには涼やかな、ときには暖かい空気をまとい、人や生き物を優しく包む。

横山さんが風呂敷教室や風呂敷の本で伝えたいことは、風呂敷の使い方ではなく、このような風呂敷の心、そして人や生き物が健やかに暮らせる自然や環境の大切さだ。

7. ふろしき王子のその先

「もし風呂敷に出会わなかったら」と尋ねると、横山さんは次のように答えた。

「もともと生き物と自然が好きで、東京の隅田川をきれいにしたいという気持ちがありました。だから、風呂敷ではなくても別の何かを見つけて、その気持ちを表現していたと

思います」

もはや体の一部である風呂敷を通じて、周りに影響を与えている横山さんだが、その心を伝える表現手段は、たとえば、絵でもよいのだ。現に彼の描く絵は、周りの世界を少しずつ変えていく力を持っている。

「人の意識が変わって世の中が少しでも良くなればそれでよい」

それが横山さんの思い。これからも風呂敷の心を胸に、緻密に丁寧に自然を大切にして生きていく姿が目に見えよう。



6年振りの横山さんの新刊『その心をうえに』

横山 功

(よこやま いさお)

1979年生まれ。20歳代の頃から自然環境への意識を持ちながら、風呂敷の教室・販売、出版、商店街のシャッターアート、似顔絵教室などさまざまな分野で活躍中。



西門 克郎

(にしかど よしお)

1976年生まれ。コンサルティング会社に勤務する傍ら、中小企業の社長の夢、従業員の幸せを後押しする支援に取り組む。2019年中小企業診断士登録予定。

